船戸咲子学級における「深い学び」

―学習集団による解釈の深化―

*吉　村　敏　之

`Deep learning' organized by FUNATO Sakiko

YOSHIMURA　Toshiyuki

要　旨

島小学校（現在の群馬県伊勢崎市）において斎藤喜博校長のもとで1952年から11年間にわたって続けられた「授業の創造」を先導した教師は、船戸咲子である。船戸学級では、子どもたちが各自に見つけた問題を集団の力で組織して深く追求する「独自学習」を充実させた。国語の文章の読解では学習集団によって解釈が深められた。その事実は、今後の教育で重視されている「主体的・対話的で深い学び」を実現するための指針となる。

Key words：「深い学び」、独自学習、教材解釈、船戸咲子、島小学校

目次：はじめに

1．「独自学習」の重視
2．考えを互いに検討できる子ども
3．教師による学習の組織
4．解釈を深められる学習集団
おわりに

はじめに

船戸咲子は、学級を学習集団として組織し、群馬県島小学校の「授業の創造」を先導した。本稿では、船戸が1960年度に担任した５年生の国語「塩田の父」（『新編　新しい国語　五年（Ⅱ）』東京書籍　1955年文部省検定済に所収）の学習の経過をたどり、船戸学級で創られた「深い学び」の特質をさぐる。1960年12月２・３日に行われた、第６回公開研究会での「発表学習」の記録（船戸咲子「五年国語『塩田の父』」『現代教育科学』第40号・1961年４月号　特集　授業の創造―島小の実践から何を学ぶか）をふまえて、学習集団の力による語句の解釈の深化をとらえる。

これからの教育で求められる「主体的・対話的で深い学び」のあり方をさぐり、教師が学習の深化を促す授業を創るための原理と方法を明らかにする際の、ひとつの手がかりとする。

※本稿では、教師と子どもの名前を敬称略とする。

1．「独自学習」の重視

「塩田の父」は、江戸時代の文政９（1826）年３月から文政12（1829）年８月にかけて讃岐国（現在の香川県）坂出で塩田を開発した、久米栄左衛門（通賢）［1780・安永９年～1841・天保12年］の決意と行動を描いた文章である。

船戸の定めた題材の目標は、次の二つである。

○どんな苦しみにもくじけないで、多くの人のしあわせのために塩田の仕事にうちこんでいる、栄左衛門の人間性を深くよみとらせる。

○複雑な文章を深くよみとるために、主語、述語の関係や修飾語の意味などをしっかりおさえて学習を進めていく。

＊　教職大学院

学習の展開を、以下のように計画した。

1．独自学習
　○　読みの練習と問題みつけ―４時間
　○　自分でみつけた問題とむずかしい語句の研究―５時間
2．話し合い学習
　○　小さい問題はつぶしながら学級問題をのこす
3．独自学習
　○　前の時間にのこした学級問題を自分なりに解釈する―３時間
4．発表学習
　○　塩田をつくろうと思いついたときのこと―１時間
　○　確信ができあがるまでの苦心―１時間
　○　工事にとりかかってからのこと―１時間
5．整理学習―２時間

全体で20時間の予定のうち「独自学習」に６割の12時間を充てる計画であった。「独自学習」が重視されたのである。「独自学習」で「学級問題」として残された問題を、子どもは、各自、自分なりの解釈をしたり、お互いに他の人の考えをきいたりする。船戸は、いろいろな考えを出す子どもたちの中に入り、問題を見つけ、引き出したり、結びつけたりしながら、「仲人役」をする。そして、問題を集めて、「発表学習」の組み立てを考える。教材の本質にむけた追求を促す、教師の指導が必要である。学級全員で取り組む価値のある問題を「独自学習」でつくれるかどうかが、学級一斉の「発表学習」の質を決める。

「塩田の父」の「独自学習」では、子どもたちの間から問題が出され、それぞれの考えが示された。「くぎづけされたようになっているのでしたという所だよ」「そうじゃない、あたしは『おひるですよ』といった時だよ」などと、教室のあちこちで、子どもたちが自分の意見を出している。「しかし、その時、栄左衛門はこの果てもなくひろがった砂浜に、塩田をひらくことを思いついたのでした」という、教科書の文［本稿の終わりに全文を示した］のうち、「その時」がいつなのかが、問題になっていたのである。

船戸は、子どもの学習が教材の本質の追求につながるよう、「発表学習」の計画を立てた。＜こちら［教師］でやること＞として、「『その時心の中で塩田を開くことを考えていた』のその時を問題にする」。その際、二つの点を重視する。一つは、「その時」の解釈を「図をかいてはっきりさせる」。すなわち「○さしずしながらみていた　○『もうおひるです』といったとき　○『先生』とよばれたとき」を明確にする。もう一つは「くぎづけにされたことを問題にする」。「どんなようすか」「なにがくぎづけされたのか」「どうしてか」を考える。「その時」を問題にして文章の読みを深めようと、船戸は次の時間の学習を構想した。

さらに＜子どもの動き＞を予想する。「その時」として注目しそうな文を５つあげる。「１．それまで遠めがねで―　２．まだじっと遠めがねをのぞき―　３．すぐまた遠めがねに目を返し　４．くぎづけされたように―　５．冬の日ざしをあびてかがやいている砂浜」。そして、＜めあて＞は「『くぎづけされた』ということは、１．２．３．を通しての状態をいっているのだということをはっきりさせる」とする。「くぎづけされた」のは何かを問題にする際、子どもから出される考えとして「○目が砂浜に　○からだがその場所に　○目が遠めがねに　○遠めがねがひとつの場所に」の４つを予想した。

授業での＜予想される問題点＞については「自分ひとりの考えにとじこもっている子がいるかもしれない」とし、どの子も学習に参加して学級全員の力で解釈を深められるよう配慮した。

２．考えを互いに検討できる子ども

「独自学習」を受けて、「その時」とはいつなのかが、「発表学習」の中心問題となった。子どもたちの考えを出せるだけ出してから、問題を掘り下げる授業を目指した。

船戸が子どもたちに「その時というのが、問題でしたね」と話しかけると、子どもたちは「待っていました」というように、教室のあちこちから声を上げた。船戸は、どの発言も聞き漏らさないようにしたいと思った。

教室の南の隅のほうにいる、つとむが立ち上がり、「おれはね、68頁の『もうお昼です。と言った時のまま、まだじっと遠めがねをのぞきつづけているのでした』というところだと思う」と言った。すると、すぐそばに座っている栄司が「おれもそこだと思う。だってじっとのぞきつづけている、とあるから」と、つとむの意見に賛成した。

それに対し、「私はちがう」と言いながら、幸子とよし子がいっしょに立ち上がった。二人は顔を見合わせてにっこりし、幸子が座ったので、よし子がみんなに話した。「あたしのは、69頁の『先生とよばれた若い人は、その声にちょっと目をあげてうなずきましたが、すぐまた遠めがねに目を返しました』のところだと思います。ここで、塩田のことを思いついたので遠めがねに目をうつしたのだと思う」と言った。続いて幸子が「私のは、よし子ちゃんの考えのところに、にているのだけど、すこしちがって、『静かに遠くつづいている砂浜に、くぎづけされたようになっているのでした』というところだと思う。くぎづけされたというのは、栄左衛門の心がくぎづけになったのだから、ここで思いついたのだと思います」と、意見を出した。幸子の考えにも賛成する子どもたちの声があった。

誰の考えにもうなずかないでいた恵子が立った。「私のは、みんなのだれともちがって、文のはじめのほうの『やがて日が真南から少し西に移ろうとした時、それまで遠めがねでのぞきながら、人々の仕事のさしずをしていた…』というところだよ」と言って、いつもの調子ですましていた。すると、「恵子ちゃんのは、おかしいよ、だって、その時は、人々の仕事のさしずをしていたんだから、塩田のことなんか考えられないわけだよ」と、好美が反対した。つとむも、他の子たちも、「そうだそうだ」と好美の意見に同意する。

恵子が困ってしまうかなと船戸が心配すると、後ろのほうにいる次郎が「おれだって、恵子の考えと同じなんだよ」と言い、応援するように恵子を見た。

船戸は、次郎の姿を「立派だ」と感心した。恵子を応援するからではなく、いつも元気のよい、つとむや好美、他の子たちも「恵子ちゃんの考えはおかしい」と言っているのに、「おれも恵子ちゃんと同じだよ」と言えることが立派だと思った。

恵子はどうするだろうかと、船戸は黙って子どもたちの顔を見た。恵子の考えも、つとむの考えも、みんなの出している考えがおもしろい問題になっていくし、それぞれ正しいと思った。

恵子が立ち、元気のよい声で自信ありげに言った。「人々のさしずをしながらだって、塩田のことは考えられるよ。人々はおとなだもの、さしずをしておいてから、遠めがねで砂浜をのぞいては、塩田のことを考えているんだよ、ここではね」と。今度は、いつもおとなしい次郎がニコニコとして立った。「おれのわけは、恵子ちゃんとちがうよ。だってさ、つとむちゃんなんかのところの文は『さっきみんなに、もうおひるです。といった時のまま、まだじっと…』というところだいね。そのさっきとか、いったままというのは、恵子ちゃんのいっている文章をさしているんだよ。だから、おれは恵子ちゃんのところでいいと思う」と、ゆっくり考えながら言った。

「次郎ちゃんは、よく文章をよみとっているのです。他の子どもたちには、まだこの次郎ちゃんのいったことがわかっていないようです」と、船戸は判断した。そこで、「次郎ちゃんがすこしつまらなそうだけど問題がこみいってくるので、この問題は残す」とし、子どもたちから出た問題を整理することにした。

以上の子どもたちどうしの話し合いでは、教師の助けがなくても、「その時」の解釈について、お互いの考えが検討されている。自分の考えと他人の考えの、同じ点と異なる点を理解できること。考えの微妙な違いに気づけること。考えは同じでも理由が違うことがわかること。教科書の文章の文や語句を根拠に自分の考えを示せること。自分の考えを他人にわかるように伝えられること。「独自学習」の成果が表われている。

3．教師による学習の組織

問題を明確にするため、船戸は、子どもたちの考えを黒板に整理した。

1	恵　子 次　郎	P.67	さしずをしながら、「みなさんおひるです」といった時
2	つとむ 栄　司	P.68	「おひるです」といった時のまま、まだじっと遠めがねをのぞき続けているのでした。
3	よし子	P.69	うなずきましたが、すぐまた遠めがねに目を返しました。
4	幸　子	P.69	静かに遠くつづいている砂浜にくぎづけされたようになっているのでした。
5	玉　枝	P.72	栄左衛門ののぞいている遠めがねにもただ冬の日ざしをあびて、きらきらかがやいている白い砂浜がみえるだけでした。

考えを整理した板書をもとに、学習に参加している全員の子が、各自、どの考えに賛成なのかを確認した。「まちがっても、なんでも、自分の考えをはっきりさせて、問題にとりくむことが自分をたしかめることが出来たり、また問題もはっきりさせること」であり、「大切なこと」と船戸は考えた。

手をあげさせて調べると、２と３の考えを持っている子が多かった。

船戸は「４のくぎづけされたように…というのは、１、２、３の状態を通していっているのだ、ということをわからせたい」「そのことによって、玉枝ちゃんの出した５の問題もはっきりするだろう」と思った。そこで、「くぎづけされたように」を問題にすることにした。すでに「独自学習」で問題とされ、子どもは、それぞれの考えを持っていたからである。

好美が「私は、くぎづけというのは、くぎでくっつけてうごかなくなってしまうことだったら、栄左衛門が立っているその場所に足がくぎづけされたようになっているのだと思う」と言った。それにつれて、いろいろな意見が出てきた。また、黒板に整理した。

くぎづけ　○足がその場所に…好美
　　○目が遠めがねに…恵一
　　○目が砂浜に…ひろみ
　　○目と心が砂浜に…恵子
　　○めがねが砂浜に…真知子
　　○からだ全体が砂浜に…よし子

よし子は「栄左衛門は、からだ中で、塩田のことを考えているのだから、手も、足も、目もみんな、塩田を作ろうとする砂浜にくぎづけにされたのです」と、力を入れて説明した。すると、恵子が「そうだ、あたしもよし子ちゃんのにさんせい、目と心ではなくて、からだ全体が砂浜にくぎづけになったのだと思う」と、よし子の考えのほうに変わった。

不思議そうな顔できいていた、ひろみが「だってよし子ちゃん、手や足は、塩田のことなんか考えられないが」と言って、真面目な顔でよし子を見た。よし子はさっと立ち、ひろみのほうを向いた。そして、「考えられるよ、だって、あたしだって、手をあげ、といえば、手があがるよ、足をあげ、と思えばあがるに」と、手を前にあげたり、足をあげたり、一生懸命な顔で言った。教室いっぱいの参観者がどっと笑った。恵子は、自分の言ったことがそんなにおかしかったのかな、という顔でまわりをみまわして、座った。

笑い声の中で、「ひろみちゃんはひろみちゃんなりに、恵子ちゃんは恵子ちゃんなりに、問題にぶっついて、いっしょうけんめいに考えている」と、子ども個々が自分なりに学ぶ姿に、船戸はうれしくなった。

「まだなにか考えはありますか」と船戸がたずねると、はじめが「真知ちゃんの、めがねが砂浜に、というと、めがねだけのような感じがする」と言った。他の子もうなずいて「そうね、栄左衛門をぬきにして、いるみたいな感じがする」と言い出した。すると、真知子は「だって、本をみて、そうにかいてあるよ」と、教科書を持ち上げた。教科書には「先生の遠めがねは、聖通寺山のふもとから波打ちぎわまで、冬の日をきらきらあびて静かに遠く続いている砂浜に、くぎづけされたようになっているのでした」と書いてある。「だから、ここでは、遠めがねが砂浜にくぎづけされたことになっているわけね」と船戸が確認すると、幸子が「だけど、その遠めがねには、栄左衛門の心も、からだもみんなひきつけられているのだから、いいんだと思います」と言った。「だから、みんなから出てきた考えは、みんないいわけね」と、船戸が、子どもたちの「くぎづけ」の解釈をすべていかした。

４．解釈を深められる学習集団

「くぎづけされた、というのは、栄左衛門ののぞいている遠めがねのようすを表わしているということでしたね」と、前の授業を受け、次の学習へと進んだ。「そうすると、遠めがねが、砂浜を見つめていたのは、いつからだろうか」と、船戸が質問した。栄司とつとむの二人が身を大きく乗り出して「それは、２のところの、じっと遠めがねをのぞき続けているのでしたの所だよ」と、はりきっている。前の時間に残された、次郎の出した問題に戻る。次郎の問題を大きく取り出そうと、船戸は考えた。次郎も、教科書を抱えて乗り出し、「大いにうれしそう」だった。

つとむの出した文を全員で考えることにした。教師「先生とよばれた人は、だれのこと」、子ども「栄左衛門のこと」、教師「さっき、というのは、いつのこと」、子ども「おひるです、とみんなにいった時」、教師「時のまま、というのは」、子ども「人のさしずをしていた時のまま」と、船戸と子どもの間で問答を重ね

た。その後、船戸が「言った時のまま、まだじっと…というと、遠めがねは、ずっと続いているんじゃない」と問いかけた。すると、栄司が「あれ、『のぞき続けているのでした』とあるよ」と、びっくりしたように、見つけ出した。他の子たちも「あれ、それじゃどこから、続いているんだな」などと、教科書をめくり始めた。恵子に賛成した秋子が「１の所だよ、恵子ちゃんの出した所さ」とうれしそうに言った。すみ子が「本では、そこだけど、もっと前から、みていたよね。だって、『それまで遠めがねでのぞきながら、人々の仕事のさしずをしていた』とかいてあるもの、それまでというのは、もっと前からみていた事になるものね」と、みんなに言った。みんなも「そうだね、だけどこの文章では、恵子ちゃんの所だね」と、考えを整理した。

この話し合いによって、前の時間の板書の、１～２～３までの状態が、「くぎづけされたように」と表現されているのだ、ということもわかってきた。それから、５の玉枝の出した考えも１～２～３のことを表わしているのだということが確認された。

次に、「栄左衛門は、心の中でどんなことを考えていたのだろう」という問題に進んだ。子どもたちは、自分が栄左衛門になったつもりで考えを出してみた。

○和子の考え：坂出村に塩田が出来ると、そこから、塩がとれる、その塩が、他の村にひろがっていく、そして、だんだん、しみこむように全国にひろがっていくことだ。（図１）

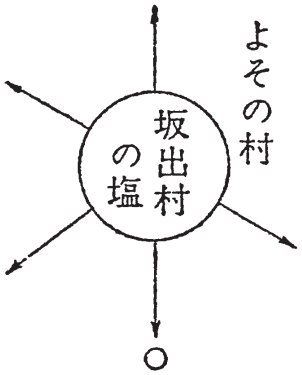

図１

○恵一の考え：坂出村で塩田づくりがはじまると、他の国にも塩田づくりがひろがっていくから、他の国にもゆたかになれるということ、だから坂出村で塩田づくりをすることは、坂出のことだけでなく、全国のためになるのだ。

○健夫の考え：びんぼうな坂出村がお金もちになると、たのしい村になれる。そうすると、そのたのしいのが他の村にもつたわって、みんながたのしくなる。

○恵子の考え：坂出村に塩田が出来て、ゆたかな村になることは、坂出村は、讃岐の国の中にあるのだから、讃岐の国がゆたかになったのと同じで、讃岐の国がゆたかなたのしい国になると、他の国も、まねをして、うんとはたらいて、ゆたかな村やゆたかな国になっていく。（図２）

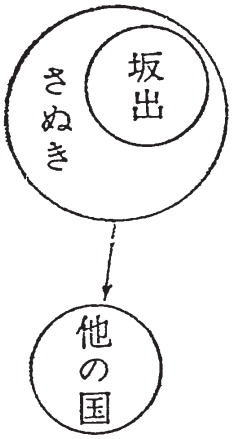

図２

○次郎の考え：坂出村は、小さい村だけど、その坂出村は、さぬきの国の中にあるのだし、さぬきの国は、四国の中にあるし、四国は日本の中にあるのだから、坂出村がよくなるのは、日本全体がよくなることだ。（図３）

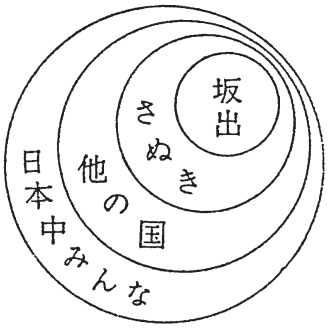

図３

○幸子の考え：私なんかの組のことを考えると、テストで私がよい点をとると、私のグループの点がよくなることで、私のグループがよくなったことは、五年全

体がよくなったことだから、このこともそうに考えていく。

国語の学習が、学級づくりの問題にまで広がった。つとむが「それじゃ、栄左衛門の考えていたことと、おれなんかがやっていることは、すこし似ているところがあるね」と言うと、学級生活でのいろいろな問題も出された。

子どもたちの学習の深化を支えたのは、船戸の教材解釈の深さと指導計画の的確さである。「栄左衛門が心の中で考えたことは何か」を問題にする際、教科書の文章「貧しい坂出村は豊かな村になりそれはそのままに讃岐の国全体の富となる。いやそれは讃岐の国一国の人をうるおすだけではありません」の中で、線を引いた語句をはっきりさせようとした。そして〈それはそのままに〉〈いやそれは〉〈うるおす〉を解釈するには「文章にくっついて考えていく」としている。「次郎の考え方をはっきりしさせてそれをわからせたい」とする。授業の〈予想される問題点〉は「広い解釈ができない子がいるかもしれない。そんなときに自分たちの学級づくりの例などでてくるとよい」とされている。学級生活の経験をふまえて文章の読みを深めようとしたのである。

おわりに

船戸は、「塩田の父」を以前扱った際（1957年12月）には、栄左衛門が塩田開田の仕事にとりかかってからの苦心する所に重点を置いた。この授業では、栄左衛門の塩田開発を決意するまでの考え方に焦点を当てた。

また、以前は、文章をていねいに解釈したり、語句を調べたりして、そのことだけから栄左衛門を理解しようとした。今回は、一つの言葉を、幅広く解釈し、子どもたちの中から出てきた考え方を中心にして読みを深めた。この学習を通じて、「子どもたちが、非常にいろいろな解しゃくをする」ことに、船戸は驚く。さらに「子どもの中から出てきた考えをもとにして、文章を読解していくことが、子どもたちに深いそして幅ひろい解しゃくをさせていくことが出来るのだ」と実感した。

「塩田の父」を深く読み取った子どもたちは、船戸が４年生から担任した。当初は集団で学習を深めることができなかった。各自の考えを出し合って「独自学習」を深め、さらに学級全体の力を必要とする問題を追求できる子どもへと、船戸学級の生活で成長した。

担任したばかりの４年生は「みんなでひとつのことを考え合っていくこと」ができなかった。算数の計算問題の答えを調べ合って「みんなに共通した問題やまちがいを発見し、みんなの問題として考え合おう」と、船戸は考えた。机の向きをグループ学習のできる形に変えても、「もじもじとノートをめくったり、鉛筆をけずってしているだけ」だった。船戸が「さあ、はじめましょう」と声をかけても学習に取りかからないので、教室の真ん中の四人組に入った。「一番のこたえはみえ子ちゃん」「５」「５だけじゃなくて、みんないって」「21÷４＝５…１」「二番は、ひろみちゃん」と、少し大きな声で、みんなにきこえるように学習を進めた。他のグループも真似て、20分もたつと、「あたしのは、そうじゃないよ」「よくきこえない、もっと大きな声で」「ちがうよ、あたしは」と、教室中がにぎやかになった。子どもたちは、それぞれ、自分を主張できるようになったのである。

しかし、「どうしてそうなったのだろう」「ここがちがうからだ」など、「他の人がどんなやり方で、自分とちがうのだろう」と考える発言はない。船戸が、子どもたちの騒いでいる原因である問題を見つけて投げかけても、何の反応もなく、黙りこくっているだけだった。グループ学習としての意味はなく、一人ひとりに「あなたは、ここがちがっている」と教えてやるほうがよかったとも、船戸は思った。「自分だけ、とか、私は、というつよい意識はあっても、その自分をとりまいている、学級のみんなとのつながりがしっかりできていないのだ」と、担任した学級の課題を実感する。「子どもたちひとりのもつ力を伸ばし他の人の考えをも、考えられるような力に、もっていかねばならない」と、学級を学習集団として組織するよう努めた。

船戸は「学習は、いつも、自分ひとりのものであってはいけない」として「学級の集団の中にあって、どう、自分の考えを発展させ、つみかさねていったらよいか、ということの中で行われる学習」を求めてきた。船戸が３年生以外の５年間を担任した1959年３月卒業の６年生は、他人の考えに学びながら自分を伸ばせる学習集団を形成し、「島小教育の典型」とされた。一人の

まちがいを学級全体の問題として追求する「～ちゃん式まちがい」、他人の思考の内容と過程を想像して各自が思考を深める「想像説明」など、学級が集団の力で学習の質を高める方法が生み出された。

卒業した６年生の学習の事実をふまえながら、新しく担任した４年生の力を船戸が引き出し、子どもたちは、５年生になると深い学びを創れる集団へと成長したのである。

〈付記〉

本稿は、科学研究費助成事業・課題番号16K04450「学習集団の組織による学力形成―日本における協同的な学びの系譜」による研究成果の一部である。

〈引用資料〉

- 船戸咲子「グループ指導」『現代教育科学』No.10 1959年７月号　特集　教育実践の科学化
- 船戸咲子「五年国語『塩田の父』」『現代教育科学』No.40・1961年４月号　特集　授業の創造―島小の実践から何を学ぶか

〈「塩田の父」柳田国男編『新編　新しい国語　五年（Ⅱ）』東京書籍　1956年〉

文化三年といえば、今から百五十年ばかり前、わが国が、まだ徳川幕府のもとに、多くの大名によって小さい国々に分かれて治められていたころのことです。

その年の冬の静かに晴れたある日、讃岐の国阿野郡坂出村のうら山、聖通寺山で、いろいろのむずかしい測量機械を使って、熱心にあたりの地形を測量している七、八人の人がいました。

冬といっても、春がもう足音をしのばせて近づいて来ているあたたかい日でした。山はだには、かすかな北風が海の方からふいて来てはいましたが、その北風さえも、こぼれるような日ざしにあたためられて、熱心に機械を使っている人たちのほおには、かえって快く感じられるほどでした。

やがて日が真南から少し西に移ろうとした時、それまで遠めがねでのぞきながら、人々の仕事のさしずをしていたひとりが、

「みなさん、お昼です。さあ、お弁当をいただきましょう。」

と、声をかけました。

ほかの人たちは、その声におどろいたように日ざしを見上げてから、仕事をやめ、日当たりのよいくぼみにこしをおろして弁当をひろげ始めました。

その人たちのせなかには、ほかほかとあたたかく、日ざしがふり注いでいます。目の前に見おろす瀬戸の内海は、きょうは油を流したように静かにないで、白帆がうかんでいるのが見えます。青い海、白い帆、そして緑の島々。こうしたこのあたりの美しいけしきは、遠いむかしから、絵のようなけしきだと言われてきましたが、きょうはことさらに美しく見えます。

弁当のはしを使いながら、人々は、仕事につかれた目をその美しいけしきに投げかけていましたが、そのうち、ひとりがふと気づいたように、

「おや、先生は―。」

と、声を上げました。みんなは、その声に、ぼんやりと海をながめていた目を、もとの山はだに返しました。

先生とよばれた人は、さっき、みんなに、「もう、お昼です。」と言った時のまま、まだじっと遠めがねをのぞき続けているのでした。その人は、まだ三十歳にもならないわかわかしい人でした。しかし、遠めがねをじっとのぞきこんでいるその人のすがたには、こうごうしいばかりに威厳に満ちた気品が感じられるのでした。

弁当をひろげていた人たちは、

「先生―、先生―。」

とよびました。先生とよばれたわかい人は、その声にちょっと目を上げてうなずきましたが、すぐまた遠めがねに目を返しました。

「先生は何をみていらっしゃるのだろう。」

その時、つぶやくように言った人がありました。そういえば、なるほど、先生の遠めがねは、聖通寺山のふもとから波打ちぎわまで、冬の日をきらきら浴びて静かに遠く続いている砂浜に、くぎづけされたようになっているのでした。

先生と言われた人は、後に、その坂出の砂浜に日本一のりっぱな塩田を開いた久米栄左衛門でありました。

栄左衛門は、安永九年、同じ讃岐の国大内郡引田村馬宿の貧しい半漁半農の家の子として生まれました。おさないころからかしこい子供で、成長していくにつれて、馬宿の海蔵院というお寺のおしょうさんや馬宿に近い南野村の伊藤長吉という人に、わが国や中国の古い本をおそわりました。その後、栄左衛門は大阪に出て間重富という科学者の門下生になりました。間重富は、当時わが国で重きをなしていたりっぱな暦学者でした。

おさないころから指先の細工仕事がじょうずであり、また、どんなむずかしいことでもすぐ覚えて人をおどろかせた栄左衛門でしたが、そのうえ何事につけても人一倍熱心に努めはげみましたから、遠めがねや測量機械といった複雑な組み立ての機械もすぐじょうずに使いこなすことができるようになりましたし、天文学、測地学、暦学などといったむずかしい学問にもすぐ明かるくなることができました。

栄左衛門は、父の死後、家に帰り、大阪の間先生のもとで学問をしていた時と同じように、熱心に家業にはげみました。しかし、大阪でりっぱな学問を修めてきた栄左衛門を、殿様はそのまますててはおきませんでした。ちょうどそのころ、殿様は讃岐の国内の土地をくわしく調査測量することを考えていましたので、そのことを栄左衛門に命じました。こうして栄左衛門は役所からさし向けられた人たちを助手として、国内の土地測量にのり出したわけであります。

さて、坂出のうら山、聖通寺山から、栄左衛門が遠めがねでのぞいていた砂浜には何があったのでしょう。助手たちの目に、ただ何もない砂浜だけがうつったように、栄左衛門ののぞいている遠めがねにも、ただ冬の日ざしを浴びてきらきらかがやいている白い砂浜が見えるだけでした。しかし、その時、栄左衛門は、心の中で、この果てもなくひろがった砂浜に塩田を開くことを考えついたのでした。どんな作物も作ることのできない広い砂浜、もし、ここから塩をとることができるとしたら、どんなに世のため人のためになることだろう。貧しい坂出村は豊かな村になり、そ

れはそのまま讃岐の国全体の富となる。いや、それは讃岐の国一国の人をうるおすだけではありません。

しかし、そう考えついても、栄左衛門は、この広い砂浜を塩田にするためには、十人や百人の人の力ではおよびもつかないことを知ってしました。それは、千人の人が力を合わせても、長い年月がかかる大きな事業であります。もちろん、たいへんな費用もいります。栄左衛門は、やっと遠めがねから目をはなしました。そして、助手たちのそばに来てすわり、弁当の包みを解きました。

栄左衛門は、その時、塩田のことは一言も話しませんでした。ひとり自分の心にだけ、いつか自分がここに塩田を開こうとちかったのです。栄左衛門が二十七歳の時のことであります。

栄左衛門が讃岐の国の測量をすませた二年後、徳川幕府の命令で日本全国を測量していた伊能忠敬が、いよいよ四国測量のため、高松にわたってまいりました。その時も、栄左衛門は殿様からめし出されて、忠敬の測量を手伝いました。栄左衛門が前に測量していたことが、この時の忠敬の仕事にどんなに役立ったことでしょうか。

その後も、栄左衛門は、馬宿のわが家にあって、百姓の仕事にはげみました。しかし、その間も、坂出の砂浜を塩田にする考えをわすれたことはありませんでした。栄左衛門は仕事のひまを見つけては、いく度もいく度も聖通寺山に登って、海岸の地勢や潮の動き方などを細かく調べました。雨の日に登って雨のことを調べ、はげしい風にふき飛ばされそうになる日にも登って、風の日のことを調べました。そして、いく年かたつうちには、栄左衛門の心の中には、もう、いつ工事に取りかかるようになっても、必ず成功することができるという確信ができ上がっていました。

栄左衛門は、その後は、阿波･伊予･播磨･備前･備後などの国々の塩田を見て歩きました。その国々の塩の作り方や、塩の売買のしかた、それからまた塩を作っている人々のくらしのようすなども調べて、もし、自分が坂出に塩田を作るようになった場合、どういう方法を取ることがいちばんよいかということまで考えを進めました。

そういう調査のことは、貧しい栄左衛門ひとりの力でもできることでしたが、いざ塩田を開くということになると、とうてい、ひとりやふたりの力でできることではありません。いつか栄左衛門は四十七歳になってしまいました。初めて聖通寺山から坂出の砂浜をながめおろした日から、二十年の年月が過ぎ去っているのです。あのころはわかかった栄左衛門も、今では頭髪には白髪をまじえ、老いを間近にした人になっているのです。

文政九年、栄左衛門にいよいよその機会がやって来ました。文政七年冬、栄左衛門は、苦しくなった藩の財政を救うために、坂出の砂浜に塩田を開くことを殿様に願い出ていたのでしたが、その願いが聞き届けられたのです。文政九年三月十一日、栄左衛門は、高松によび出されて、殿様から坂出塩田の開田を命ぜられ、御普請奉行という役をおおせつけられました。

栄左衛門は、殿様への願書に、もし塩田開発のことが失敗した時は、死罪をおおせつけられてもよいということを書きそえていました。それほど栄左衛門の願いは懸命であったのです。栄左衛門は、殿様の命令がおりると、すぐむすこの市太郎や殿様からさし向けられた下役たちを引き連れて､坂出に出かけて行きました。

人夫の募集が始まります。讃岐はもとより、伊予や備前、備後からも人夫は集まってまいります。きのうまで何もなかったさびしい砂浜に、きょうはそうした人夫たちが、にぎやかなかけ声をひびかせて働き始めました。

栄左衛門は人々のまっ先に立って働きました。測量からうめたて、地ならし、すべて栄左衛門のさしずによって人々は動くのです。もともとこの塩田開田のことは、高松藩のとぼしくなった財政を救うためにくわだてられたことですから、藩から出る費用には限りがあります。栄左衛門のいちばん心配したことは、このことでした。それで、冷たい雨がふって人々が仕事を休もうとしている日でも、栄左衛門はひとりでくわを持って仕事を始めるのでした。それを見た人夫たちは、

「お奉行様が雨にぬれて仕事をしておられる。」

と言って、雨やどりをしている小屋から出て来て、仕事を始めました。栄左衛門は、雨の中に働き始めた人夫たちに、藩の苦しい財政のことやこの仕事の大切なことを、かんでふくめるように話して､力を合わせて一日も早く塩田を開くようにたのみました。人夫たちも栄左衛門の心を知って快く働いてくれました。

また、こんなことがありました。それは、人夫たちにお金をはらわねばならない日に、藩にはらう金がなくて、それができない時のことでした。栄左衛門は、馬宿の自分の家に帰って、田や畑を売りました。家も売りました。また、知り人からも金を借りました。かねてから栄左衛門の人のためにつくすという清らかな心を知っている人たちは、気持よくその金を貸してくれました。栄左衛門は坂出にとって返すと、そうしてできた金を殿様からもらった金だと言って人夫たちにはらいました。

栄左衛門は、坂出の塩田を開くために、自分の持っていた物をすべて投げ出してしまいました。もちろん、そうしてでき上った塩田は、栄左衛門のものではありません。しかし、自分が何一つ持たないびんぼうな人になっても、多くの人がそれによって豊かになってくれれば、栄左衛門の願いはとげられるのです。

こうして三年と五か月の後、文政十二年八月、坂出塩田はでき上ったのです。南を、金山、笠山、常山、讃岐富士、角山、聖通寺山に囲まれ、東に乃生岬、西は常磐山の出鼻に囲まれた広い砂浜は、今やごばんの目のように美しく作り上げられた塩田に変わっているのです｡焼きつける秋の日ざしに､ひろびろとひろがった塩田を見つめる栄左衛門の目には、二十数年の思いつめてきた願いのとげられた喜びが、真珠のようななみだとなってうかんでいました。

栄左衛門は、天保十二年五月七日、六十二歳でなくなりました。

その後、栄左衛門は、坂出神社にまつられ、今もなお、土地の人々に感謝されています。

（平成29年９月29日受理）